

第27回『教行信証』に学ぶ会 講師：延塚知道先生 【ライブ版】

2024(令和6)年4月11日(木) 会場 円徳寺

講題：『教行信証』 信巻 善導大師の三願転入

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏

こんにちは。それでは最初に「三帰依文」を拝読しましょう。

人身受け難し、いますでに受く。仏法聞き難し、いますでに聞く。
この身今生において度せずんば、さらにいずれの生においてかこの身を度せん。
大衆もろともに、至心に三宝に帰依し奉るべし。

自ら仏に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、大道を体解して、無上意を發さん。
自ら法に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、深く經藏に入りて、智慧海の
ごとくならん。

自ら僧に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、大衆を統理して、一切無碍ならん。
無上甚深微妙の法は、百千万劫にも遭遇うこと難し。我いま見聞し受持することを得たり。願わ
くは如来の眞実義を解したてまつらん。

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏

講義 1

どうもこんにちは。お忙しい中、お集まりをいただきまして、大変ありがとうございます。
えーみなさんの元気さをいただいて、お話を進めさせていただいているようなことであります。
えーバタバタしておりまして、昨日まで京都に居りました。明日一日あって、明後日から今度は
山形に行きます。山形は桜が満開だそうで、まあまあ、倒れないようにして、頑張らないといけ
ないというふうに思っています。

みなさんと一緒に、「信巻」の親鸞聖人の記述を拝読しています。言うまでもなく、今日の經典
の註釈書が終わって論に入ると、「行巻」は、龍樹、天親、七祖でしたね。ところが「信巻」は、
曇鸞の『論註』、特に三不信の文章から始まって、そして、善導大師の『觀經疏』の一番大切な三
心積、それが長く引用されていくわけです。

この三心積の文章につきましては、これまで申し上げましたように、親鸞聖人は、『大經』の立
場で善導大師の『觀經疏』を読み直してるわけですね、『大經』の仏教を明らかにするというのが
『教行信証』の使命ですから、『觀經』という經典は、表向きには自力を尽くして頑張んなさいと。
そやね。ところがその自力では、どうしても救いが実現しない。それを通して、初めて阿弥陀の
本願の救いに遇う。だから『觀經』は、表向きには自力を策励する。だから三心積でいえば、「至
誠心」、「深心」、「回向發願心」、この三つね。至誠心は、眞面目に生きていきなさい。それから、
深く仏様を信じなさい。そして、仏様の世界に生まれていきたいという心を起こして、そして仏

道を歩んでいく者になりなさい。これが、表向きの『観経』の教えですね。

ところがそれを身をもって実践した善導大師は、みなさんご存じのように、真面目に生きていこうとしても、一体、真面目ってというのはどういうことか、人間の中に真実などあるのか、清沢先生の言葉で言えば、

「何が悪だやら、何が善だやら、何が幸福だやら、何が不幸だやら、何が真実だやら、何が不真実だやら、一切知りわくる、能力のない者がこの私であります。」(『わが信念』)と、こう証明された。そういうふうには、人間の方に何も真実心などないということを通して、初めて、「かの仏の四十八願は、一切の衆生をおさめてくださる」という、法の深信に展開していく。ですから、あの三心積のところには、自力から他力へという大きな展開がある。『観経』の核心になるところですね。その三心積を中心にして、親鸞聖人は、『大経』の方から、つまり隠顕。顕というのは表向きに。それから、彰隠密。隠れた意味から言えば、本願に導くため。

ですから親鸞聖人は、本願に救われた者として『観経』を読み直していく。こういう方法で『観経疏』が長く引文されました。それでね、みなさんにお礼を言わないといけないというか、この、一番大切なのは、ですから、今言う二種深信。これはみなさんご存知のように、「**自身は現にこれ罪惡生死の凡夫**」。聖典で言えば215ページですね。(西217～、島12-59～)

「**曠劫より已来(このかた)、常に没し常に流転して、出離の縁あることなし**」と信ず。」

これが自力無効。それを通して、「**かの阿弥陀仏の四十八願は**」、これ大事な言葉遣いでね、(かの仏というのは阿弥陀仏ですね。)そして「四十八願は」と説かれていますね。四十八願を説いているのは『大経』しかないんですよ。わかりますね。だから、善導大師でも、『観経』を通して『大経』の本願に救われたんだと言っているわけです。

「**かの阿弥陀仏の四十八願は衆生を摂受して、疑いなく慮(おもんばか)りなくかの願力に乗じて、定んで往生を得**」と信ず」と、こう言っているわけです。だから善導大師は、自力を策励されて自力無効ということを知った機(き)の深信と、それを通して、『大経』の本願に救われたんだと、こう表明している。そうですね。ですから、ここに、自力から他力へという、大きな展開があるから、ここが『観経』の核心になるところである。ここまではいいね。もう僕が何べんも言うということは、もうみなさんも僕も出来が悪いから、出来が悪い奴に教えるときは同じことを何べんも言うこと。そのうちに覚えるから。

ところがこの後に、ここから出発して、この後にね、善導大師は長あい文章をお書きになるんですね。それは、今言った215ページの、ええ216ページになりますね。法の深信が、最後に、「疑いなく慮りなくかの願力に乗じて、定んで往生得」と信ず」。これが216ページの1行目ですね。そうするとそのあとにね、

「**また決定して深く、「釈迦仏、この『観経』に三福・九品・定散二善を説きて、かの仏の依正二報を証讚して、人をして欣慕せしむ**」と信ず」と。

つまり『観経』は、お釈迦様が三福・九品・定散二善という自力の行を説いてくださってね、そして、浄土というのはこんなに素晴らしい世界ですよということを表わしてくださって、浄土に人を憧れさせる。「欣慕せしむ」というのは憧れを持たせる。ね、最初はそうでしょ、みなさん仏教の聞き始めというのは、やっぱり浄土という世界があるのか、この世では私たちは思い通りにいかない叶わないことばかりで、辛いけども、「ああ浄土という世界は、すべて私たちの根源的な願いを満たしてくれる世界があるのよ」と。こう言えば、「ああ浄土に生まれる。それは大事

なことやなあ」と、少しずつ育てられていくわけです。

先ほどご住職が「求道は自力と他力が重なって求道があります」と。そりゃそうや、みなさん今日出て来るのでも体調の悪い人もおったやろ。僕が一番体調悪いのやけども。行かなしゃあないから来とるやろ。それでこうやってしゃべっていると、この他力の世界に触れるわけさ。そうして感動してまた元気出す。求道ってそんなもんや。しんどいなあと思うけど友達にも会えるし、行こうと思って来ている間に、ああ自分を越えた世界に触れて、あっ大事なことがあるとこう思うて、他力に触れて、又来る。

そうやって積み重ねて来て、聞法が積み重なっていくわけですから、自力で策励していくという面と、それから向こうから他力を教えられて感動するという面と、それがより重なって求道ということが深まっていく。そういうことやね。だから、これ善導大師が一番最初は実は浄土に憧れたんやと。この世はしんどいと。この世の救いなんか無いんだと。ああ浄土しか救いがないと。お釈迦様は正しいと。で『観経』を信じるといふところから出発したんやと。こうおっしゃっているわけですね。

そしてその次に、

「**また決定して、『弥陀経』の中に、『阿弥陀経』という經典の中に、「十方恒沙の諸仏」、これはわかりますね。ガンジス川の砂の数ほどのたくさんの諸仏たちが、「一切凡夫を証勸して決定して生まるることを得」と深信するなり**」。浄土がある、浄土こそ救いなよということを証明しながら、善知識が浄土を勧めてくださる。そして、そうだ、あの生先生が言うなら間違いなからうと、こう思うて浄土に生まれたいという心が深まっていくと。こういうことやねえ。

これは実に実際的だと思いますか。観念で言ってるんじゃないですか。僕らの求道そのまんまじゃないですか。あの先生が、僕でもそうです、私の先生が言うのだから間違いないだろう。ああやっぱり浄土に生まれるということが一番の、人間の根源的な願いを満たしてくれるんだということ、を、少しずつ少しずつ教えられていくんだと。こういうふうに、善導大師はおそらくこれ、二種深信に至るまでの自分の求道の歩みをね、ここから『観経』、『弥陀経』、そしてずーっと長あくここ文章があるわけです。この長い文章を『愚禿抄』にまとめられて、この間申し上げましたように、『愚禿抄』はこれ厄介な本でね。440ページ（西522、島14-19～）、ここに、

機の深信が「**第一の深信**」、法の深信が「**第二の深信**」とあって、その次に今の文章をまとめたわけです。

「**第三には「決定して『観経』を深信す。」**」とありますね。そしてその次に、

「**第四には「決定して『弥陀経』を深信す。」**」とこうあるわけです。

「**第五には「ただ仏語を信じ決定して行に依る。」** **第六には「この経に依って深信す。」**」

つまり、『観経』、『阿弥陀経』、『大経』に依って深く信じる。それは第七深信、

「**第七には「また深心の深信は決定して自心を建立せよ」と。**」

皆さん、今まで長いこと人生生きて来てさあ、いろいろ問題があんのやけど、そして仏教を求めるといふと、何か「法を信じる」とか「救われる」とか「浄土」とかいうことが頭に浮かぶけどね、実際問題はよ、はっきり言うわ、「信じるに値する自分がない」ちゅうことじゃないかね。ねえ、若い時には金儲けして、立派な車に乗ったりなんかして、外側の人に支持させたい。ね。俺がおるぞと、俺頑張るとるぞと、認めてよというふうに、いっつも目が外に向いとるからね。

人間は金を求めても、あるいは政治家だってもうそうや、テレビなんか見とって、もう威張り散

らしているバカたれがおるけど、ああいうのは、まあまあどうでもいい。ああ威張りたいんでしょう。やっぱりねえ。そして、俺は立派やろう、認めろと。こう言ってるんですよ。だからどなたでも、いろんな形で生きて来たけど、目が外に向いているために、外の人に認めさせよう、外の人に認めさせようと。その時には、金持ちだぞとか、権力があるぞとか、地位や名誉があるぞとか言って、一生懸命外の人に俺を認めてくれ、俺を認めてくれと言って生きて来たような気がする、僕は。それは逆に言えば、本当に信じるべき自分がないちゅうことや。だからどんだけ世間の人を褒めてくれるようになったとしても、いつも不安が残る。自分で信じてないから自分のことを。それが実は一番の問題じゃないかね。

信じるに足る自分に会うこと。それが求道の目的なんじゃないかね。仏法も「法」とか「浄土」とか言っているけど、最終的にはそれを与えて、この世でこのままでよかったんだと言って、裸のまんまで七歩歩いたんだ。このまんまで十分だと言える自心を建立しなさい。これが求道の最終目標なんだと言ってる気がします。

ある面から言えばそうですよね。そうだと思いますね。だから私たちは、本当に信じるに足る自分に一度も会ったことがない。それに会うこと。それが実は機の深信なんだと。いつもいい自分ばかりを認めて、いい自分になろう、いい自分になろうとして苦勞してきたじゃないかと。今はっきりわかったと。初めて仏様の教えで、こっち側を教えられてみれば凡夫そのものである。そしてその凡夫はただの凡夫じゃない。どなたとも命が通じ合える凡夫であり、そして、その凡夫のままで実は、そのままで法に生かされる凡夫であった。それが二種深信でしょ。そういうことやね。

だから善導大師は御自分の求道、二種深信に至るまでの求道を『観経』を信ず、『阿弥陀経』を信ず、そして「第五には「ただ仏語を信じ決定して行に依る」と。これなかなか難しい言葉ですけども、これともろの所に帰ると、どういう事を言ってるのかと言うと、あっちこっち開けてごめんなさいね。さっきの所どこやね。218ページ、もう一回開けて下さい。あっあ違うか、ごめんごめん間違うた、216ページや(西218、島12-60)。さっき読みましたように『観経』を信ずる『阿弥陀経』を信ずるとありますね。その後、少し読んでみますよ。

「また深信する者、仰ぎ願わくは、一切行者等、一心にただ仏語を信じて身命を顧みず、決定して行に依って」、これを、今の第三『観経』、第四『阿弥陀経』の後にまとめる今の文章ですね。それどういう内容かと言うと、もう少し読みますと、

「決定して行に依って、仏の捨てしめたまうをばすなわち捨て、仏の行ぜしめたまうをばすなわち行ず。仏の去(す)てしめたまう処をばすなわち去つ。これを「仏教に随順し、仏意に随順す」と名づく。これを「仏願に随順す」と名づく。これを「真の仏弟子」と名づく」と。

ですから、この第五深信の「ただ仏語を信じ決定して行に依る」というのは、「仏願に随順する」。最終的には、「仏教」、「仏意」、「仏願」。その「仏願に随順する」ということだと。そして、「本願の名号に帰する」ということだと。それを「真の仏弟子」というんだと。こういう内容なんです。ですからそれを、440ページ、ごめんなさいね、あっちこっち、もう一度開けてみますよ。ここに、第五の「唯信仏語」、「ただ仏語を信じる」と。440ページが一番最後の行ね。ここに善導大師が、「ただ仏語を信じる」と第五のところに書いてるけど、それは今読んだように、「**三遣・三随順・三是名あり**」。仏が捨て遣(し)めたまうをば捨て、仏が褒めるところに従いなさい。そして仏願に従いなさいと、こう言われている。だから、それをもう少し言うと、

「三遣とは」、「仏の捨て遣(し)めたまうをばすなわち捨つ」、「仏の行ぜ遣めたまうをばすなわち行ず」、「仏の去ら遣めたまう処をばすなわち去る」と、こう書かれている、まとめている。そして「三随順」というのは、「**仏教に随順す**」、「**仏意に随順す**」、最終的には「**仏願に随順す**」ということやと。

「仏教に随順する」というたら、仏教の言葉を信じるということは広いですよ。それから、「**仏意**」というたら、お釈迦様の意志だからね。これに随順するというのはなかなか難しんだけど、最後にそれは「**仏願に随順する**」ということだと。そして「**三是名**」、「**これを真の仏弟子と名づく**」と、こうあるわけですね。

そうすると、この第五の「**ただ仏語を信じ決定して行に依る**」という内容は、第十八願の本願によりながら名号を信じるということだと、そうなりますね。そうすると、『**観経**』を信じ、『**弥陀経**』を信じ、本願の名号を信じる、これが真の仏弟子なのだと、こういうことになりますよね。こんなふうに、今の長い文章を親鸞聖人はここにまとめて、なぜか第三、第四、第五、第六とそして第七には、「**また深心の深信は決定して自心を建立せよ**」と。さっき言ったように「**信じるにたる自分を見つけなさい**」。「**それが仏教の求道の最終の目標なのだ**」と。「**そのために本願が説かれているのよ、そのために名号が説かれているのよ**」。こういうふうに言ってもいいと思う。そうですね。

そしてね、これまあややこしい、それを言い出すとややこしいんだけど、この第七深信は、この第七深信に当たる文章は自力なんだから、「**化身土巻**」に引くわけです。親鸞聖人はね。ということは、第二、第三、第四、第五、第六に至るまで、これは私たちの自力の求道と他力の感動とが混ざって説かれていってる、と考えられます。しかも、この間、これ何なのかよくわからんから、私もだからなかなか難しい、よくわからなかったとこなんです。しかし、これ、人の求道は『**観経**』に説かれた浄土を欣慕する。それは第十九願、修諸功德の願ですよ、あらゆる諸々の修行をしてね、浄土を欣慕する。だから親鸞聖人は『**観経**』は第十九願に当てますよね。そして『**阿弥陀経**』は、これは諸仏証誠(しょぶつしょうじょう)と。たくさん諸仏達が浄土があると教えてね、そしてそのままで浄土に生まれる者になりなさいと、一生懸命諸仏が勧めて下さる。それによって私たちは、浄土に生まれようとかう思って行くんだと。だからこれは、親鸞聖人が当てたように二十願、一心不乱に浄土に生まれたいとかう思うて行く。二十願ですね。そして、第五深信、今言った「**ただ仏語を信じ決定して行に依る**」というの、これは第十八願の行信に依りなさいと。これ(『**観経**』十九願)が第三深信、これ(『**阿弥陀経**』二十願)が第四深信、これ(『**大経**』十八願)が第五深信。

そして第六深信は「**この経に依って深信す**」と云うのですから、「この経」というのは多分前の「**ただ仏語を信じ**」、これを言うんだろうと思うから、『**大経**』を信じて本願によって救われて行きなさい。そこに本当に疑いのない自分に会ったということがあるんですと。

こういうふうに説かれてると。これよくわからんから曾我さんがこの間言ったように、「**法から機を開いて**」、確かにそうですね、機の深信、法の深信があって「**法から機を開いて、その機の求道の歩みをまた法に撰(おさ)めたんや**」と。こういう解説してるわけですよ、ようわからん解説を。それは状況説明であって、確かにそうや、法から機を開いて、機をまた法に撰めていると。うん、それは状況説明なんであって、そんなのはいくら言われても意味がわらんと。僕なんかすぐそう言うタイプだから、何を言っているのか意味わらんとって、この間思っていたとたんに

仏さんが降りて来て、これはよく見ると三願転入です。十九、二十、十八と、そうですね。だから、これは実は「善導大師の三願転入」なのだと、この間申し上げました。初めて聞いたって言うておられる方がおましてけど、初めて言ったんですから。(笑) 初めて聞いたに決まってるんで。ただし、もう少し待ってください、もう少しちょっと寝かせてね、発酵するまで、(笑) 酒になるまで。

しかし、間違いなく三願転入なんです。そしてね、これは勉強だから申し上げておきますが、『観経』は自力と他力、これしかないですね。だから自力は十九願、他力は十八願と、これしかないから表向きには、善導大師は自力と他力とこう言うわけです。二種深信、自力から他力へとこう言うわけですね。ところが隠れたところから言えば、善導大師も本願に救われたわけですから。そして、これも覚えておいてください。『大経』の特徴は、自力を二つに分けてるということ。これ『大経』だけでしょ。みなさんご存じの、これまでも何遍かはお話ししましたが、三毒五悪段の貪欲・瞋恚・愚痴と、三つやね。ところが貪欲と瞋恚は、これは僕の言い方だと時々反省することができる。あんな欲を出さなくてよかったとか、ああ腹立ててあんなこと言うたけど、しもたあ、あんなこと言わなくてよかったとか、時々反省することができる。ところが反省している根性も自力だから、この反省している根性は、人間は反省できないから、それを貪欲、無明煩惱として『大経』は貪欲として表している。だから、『大経』は自力の煩惱を、十九願の自力の煩惱と、二十願の、もう人間が反省できない仏様の智慧でしかわからないような深い人間の自力。それを二つに分けているのが『大経』の特徴です。

だから二十願の問題、あるいは『阿弥陀経』の問題を問題にできるのは、これは『大経』だけなんです。ね。ですから、申し上げているように、実は僕は善導大師の著作も色々読んだんだけど、二十願の問題に付いてはほとんど言及してないんです。ただ、みなさん読んだらわかるけど、今日もまた後で申し上げますけど、「難思議往生」、「難思往生」、「双樹林下往生」。これ(『観経』十九願)は「双樹林下往生」、これ(『阿弥陀経』二十願)は「難思往生」、これ(『大経』十八願)は「難思議往生」ですね。そんなふうに「三往生」については、善導大師は例えば『法事讃』とか、例えば『往生礼讃』とかいうのを読むと何度も出て来るのよ。ところが三つ往生が説かれているのがいったい何のことか。ここが無いから、これに付いての言及が無いために、「三往生」がどうしても『大経』、『観経』、『阿弥陀経』というふうに当てはめられない。ところがここを見ると『観経』、『阿弥陀経』、二十願の問題がちゃんと押さえられているわけです。そして十八願と押さえられているわけですね。そうするとこれは、善導大師も『大経』によって自分の求道の跡を「三願転入」として述べられた。これすごいことじゃないですか。『観経』に立った善導大師であってもね、自分の救い、自分の求道を述べる時には「三願転入」で述べておられる。

これが、親鸞聖人はものすごく感動されて、そしてわざわざ『愚禿鈔』にそこだけをまとめてここに抜き出している。それは、自分の求道の跡を表明するときに何度も申しましたが、『大経』の智慧段の教説、お釈迦様の智慧段の教説は、十九、二十、十八と説かれてる。もう忘れとろう？(笑) あのあるよ、大事なところやから言わなあかんのやけど、「これで(この会も)20何回なりました」言われたらもうぞっとするわ、僕は。早よ先に進まなあかん思うて。ほんで「死ぬかもしれん」とか言われたらさあ、もおうと思うけど、これ大事やからな。ね、阿難と弥勒菩薩に、81ページ(『大経』、西76、島1-71)開けてごらん。阿難と弥勒菩薩にね、お釈迦様が「あなた方は浄土を見てきましたか」と問うと、二人とも「見てきました」と。「胎生という

のが浄土にあったのを見てきたかね」と聞くと、「見てきました」と二人とも答えます。

そして81頁の6行目のところ。こっから大切なん。

「その時に慈氏菩薩（弥勒菩薩が）、仏に白（もう）して言（もう）さく、「世尊、何の因、何の縁なれば、かの国の人民、胎生化生なる」と。」と。覺りをほぼ悟っている弥勒菩薩でもね、どうして浄土に胎生があるのかわからない。だから、単純な話、菩薩でも、覺りを悟った菩薩でも、阿弥陀の浄土がないと仏教は完成しないと。その阿弥陀の浄土の中に胎生、化生がどうしてあるかと弥勒が問うと、お釈迦様は「慈氏に告げたまわく」、ここから印を付けなさいと言いましたね。つけとろう、忘れとるけど。

「もし衆生ありて、疑惑の心をもつてもろもろの功德を修して（修諸功德）、かの国に生ぜん願ぜん」。だからここまでは修諸功德。これ、十九願の自力。その後、

「仏智・不思議智・不可称智・大乘広智・無等無倫最上勝智を了（さと）らずして、この諸智において疑惑して信ぜず。しかるに猶（なお）し罪福を信じ善本を修習してその国に生ぜん願ぜん」。これは、罪福心。二十願の信心やね。だからお釈迦様はどうして大きな浄土の中に小さな胎生という国があるのかというと、それは、いやいやそれはあなたたちの十九願の自力と、そして自分では気がつかん、弥勒菩薩だってこれ菩薩なんだからね。だけど自分では気がつかん自力が動いとる。その二つの自力によって胎生という国に生まれるんだというので、十九願と二十願の自力、これをお釈迦様がちゃんと教える。そして最後に81頁の終わりから2行目のところ、

「もし衆生ありて、明らかに仏智、乃至、勝智を信じて、もろもろの功德を作（な）して信心回向せん」。この「信心回向せん」というのは「回向の信心」だと考えてください。他力回向の信心。

「このもろもろの衆生、七宝華（しっぽうけ）の中において自然（じねん）に化生せん」。蓮華化生、蓮華の中から生まれて浄土に生まれますよ。ですから最後に第十八願の願文が説かれている。十九、二十、十八と。お釈迦様が智慧段で説いてるからね。だからそのお釈迦様の説法によって、親鸞聖人は三願転入をお述べになられた。同時に今読んだ善導大師も本来『観経』に立った仏者だから、二十願の自力を本当は言わない方である。自力か他力かしかな言わんのだから。ところがあえてここでは、十九、二十、十八と、自分の求道の跡を述べて下さっている。これはすごいことじゃないですか。先輩が、しかも『観経』の仏教者が、『大経』の信心に立って三願転入を述べて下さっている。おそらくこういう感動をもって、親鸞が『愚禿鈔』にここをまとめたんだと思います。

そして、最終的には、三経、三願、三機、三往生、「三三の法門」。これも前言うたぞ、覚えとけよって。試験に出すぞって言うた（笑）。『大経』は第十八願、ね、難思議往生、正定聚の機。『観経』は第十九願、双樹林下往生、邪定聚の機。『阿弥陀経』は第二十願、そして難思往生、そしてここは、不定聚の機。三経、三願、三機、三往生。これが『教行信証』の親鸞聖人の最終的な立脚地だから、それに至るためにお釈迦様の『大経』の今の教説と善導大師のこの教え、この教えによって僕は、善導大師が三往生を説く、あ、なるほどこれが双樹林下往生、あ、これは難思往生、これ難思議往生とこう言っとるんだということが、これによってよくわかるわけです。だから親鸞聖人は今言った二つのまゝ道筋、それによって最終的な親鸞聖人の三機、三願、三往生という独自の了解が決定するんだと。そのために今言ったように『愚禿鈔』にここは丁寧にまとめとるといふふうに思います。ここは大事なとこやから。

えー、こないだ、まあこれ言うていいかどうか、あのまあまあ、酒を飲むとすぐ僕は人のとこ

ろに電話する癖がある。(笑) もう仏教がわからん人に電話しても面白くないから、少しわかる人に電話する。僕の教え子に青木玲というのがおる。玲のところに電話して、お一、あれは三願転入、たまたまその話になったから、「お一、あれは善導大師の三願転入だ」って言ったら、「えーすごいことを言いますね」言うて、「一回勉強に行きますから、一緒に勉強してください」と言うから、今度また4月の終わりに来るようになったけど、ここもう一回丁寧に読んで、ここは「信巻」、ここは「化身土巻」と回してるから、それを丁寧に読んで、これ一体どういうことを言うとかということをはきちっと一回やるかということを書いてますから、まあそういう勉強を通して僕が今度は熟成してきて、そして発酵してきて、うまい酒になったらもう一回言いますから(笑)。今はまだちょっと仕込み中だから。けど、間違いないんじゃないかなと思う。ね。善導大師が『阿弥陀経』に着眼している。これ大事なんです。まあまあ、あの、この間の勉強のちょっと返って復習ね、けど大事なことだから。きっと親鸞聖人が喜んでに違いないから『愚禿鈔』にまとめとるんでね。だからこれ大事なことだと思います。

それで、先に進まな、あーっ、そっか、先に進まなければいけません、もう一つだけ、これも大事だから。ここ、三心積。至誠心、深心、今のところは深心積のところの問題ね。そして回向発願心になると、みなさんがよく知ってる、あの「二河白道の譬喩」、これが出てくるね。これはもうみなさんよう知るととこやね。そして、この回向発願心のところが終わって、一番最後のところ、221ページ。ここも印付けてください。終わりから3行目。(西227、島12-65)そこに、

「三心(さんじん)すでに具すれば行として成ぜざるなし、願行すでに成じてもし生まれずは、この処(ことわり)あることなしとなり。またこの三心(さんじん)、また定善の義を通撰(つうしょう)すと。知るべし、と」。この三心積は、このほら、散善、定善で言えば散善のところに説かれているけれども、定善まで含めてこの三心積が大切なんですよという言葉で終わる。その前に、「三心すでに具すれば行として成ぜざるなし、願行すでに成じてもし生まれずは、この処(ことわり)あることなしとなり」。この言葉を誰か覚えとる人おるか。これは、実は、道綽禅師の「三不三信の誨(おしえ)」に出てくる言葉です。そうやね。**「この三心(さんじん)を具しても生まれずば、この処(ことわり)あることなし」**(『安樂集』・真宗聖教全書一405頁)というのが道綽禅師の三心積の言葉です。ということは、善導大師は師の道綽の言葉をここに持ってきているわけよ。ということは、この三心積は、『観経』の三心積は、道綽の三不三信で読んでるんですよと。こう言っている。わかりますね。

ですから、僕が最初に言ったように、一番最初に申し上げたように、曇鸞の三不信と、善導の三心積、これはどちらも私たちの自力の策励です。けれども、さっき言ったように、この自力では救われんということを通して初めて、至心・信樂・欲生という本願の三心(さんしん)に目覚めていくんだから、だから、三不三信で言えば、三不信と三信、そうなっとなね。書くとまた長なるから、分かるやろ。三不信と三信ね、そして、三不信の方には、『観経』の意味がある。三信の方には、これは『大経』の意味があると。「この三心を具して」というのは、こっちが自力の方の三心積で説かれている三心を備えて、「もし生まれずば」、第十八願の至心・信樂・欲生に目覚めて、「生まれずば、この処(ことわり)あることなし」と、道綽は書いてたわけ。それをここに持ってきている。善導大師はね。だから、この三心積は私の師である道綽がね、三不三信でおっしゃってることを踏まえて自力では救われぬ、至心・信樂・欲生しか救いが無いんだとい

うことをここで申し上げておきますよと。こういうふうに善導大師が結んでるということ。

勉強するって大事やろうが。もう、僕は教養があるために、けどそれ七僧を貫いてわかるんだ、やっぱり。あーなるほど、善導は道綽の三不三信を背景にして読んでる。私は道綽の言った通りですと。この通りですと、こう言っているんだからね。なるほど、道綽の三不三信を踏まえてる。そうすると、さっき言ったここがずっと読めるわけです。三心(さんしん)、至心・信楽・欲生の三心を問題にする三一問答の助走になっている。その助走は、道綽の三不三信と、三不三信の元である曇鸞の三不信と、それからこの三心(さんじん)という『観経』の三心釈と、それがここに助走になって出てきている。こういうことになりますね。親鸞偉いやろ。そして、自分の勝手なこと書いてないということよ。全部七祖が言ったことを踏まえて引用している。そして、善導大師もちゃんと三不三信を押さえてこう言っているでしょ、と。ここまでちゃんと押さえとる。

親鸞という人はなかなか立派な方ですね。ここまでいいかね。いいかね言うても、いいかどうかもわからん？(笑)わしがこんだけ頑張る言うとするのに何とか言うてくれー(笑)。言っとることわかろう？言っとることわかろう？そうするとき、親鸞聖人がここ引用してるけど、引用の仕方もち、結局背景に三不三信を置いているということ。そして、前には三不三信が開かれてくる曇鸞の三不信と、それから『観経』の意味を込めて道綽が言ったこの『観経』の三心釈と、これが私たちの自力を尽くすという道筋なんだというふうにおさえてる。それを通して初めて至心・信楽・欲生という本願に目覚めていくんですよと。こういう道筋になつとろうが？僕が言うとするんじゃない、そうなるんだから。引用を見たら。ということなんです。だから、僕も勝手なこと言うとするんじゃないよ。親鸞の引用したとおり、言ったとおり言っとるんよ。それがそういう道筋になつてるよつということ。ここまでいい？そうしたら。今日はお返事がいいね(笑)。それじゃあちょっと休憩しましょうか。よくわかったということですね！それじゃあちょっと休憩しましょう。(休憩)

講義 2

え、それではもうしばらくお話します。今日は難しいですか？(会場からのリアクションを受けて)難しい？(会場「いやいや、よくわかります」)わかる？いや、難しいと言われたから、あの……ま、しゃあないな(会場笑)そのうちにわかってくる。あの、難しい言われたからしもた、わけのわからんこと言うたかと思って。あの、筋は通るように言っとんのやけどな。ただ言っとることが確かに難しいかも知れん。(会場からの声を受け)うん？いや、うん、まあ、でもくり返して言うとまた時間かかるから。あの、今のところは今のところで、例えば原稿になった時に何度も何度も読み返して、聖典と比べてみることね。そうすると「ああ、そんなこと言うとなのか」と。つまり問題にしたかったことは、

- ・親鸞の最終的な三願転入。そして、
- ・『大経』・『観経』・『阿弥陀経』の位置づけ。18、19、20の願を当ててる。そして、
- ・往生、三往生(難思議往生・双樹林下往生・難思往生)

それが親鸞聖人の最終的な、親鸞聖人の、まあ、どう言ったらいいか、最終的な立脚点や。とこ

ろがあれば自分の思いつきで言ったんじゃないなくて、全部七祖で言われてることをまとめてあんなふうになった。だから、元(もと)は七祖のところにあるから。今言ったように、善導大師のところにも実は隠れたところに三願転入が語られている。これが親鸞聖人にとって感動やったから、『愚禿鈔』にきつとまとめたんやね。だから、まあ…、最終的な親鸞聖人の立脚地に至るまでのね、道程が七祖にあるんです。だから、七祖、大事なことやね。まあまあ、あの、そういうつもりで一度、また後で読んでみて、考えてみてください。えー、それでね、先に進みましょう。

この、先ほど申しました221ページに、三心積が終わる。これでほぼ、今度は三一問答に入っていく。こういうことになるわけですが、それまでにいくつかの引文があります。せっかくですから読んでみましょう。

「(般舟讚) また云わく、敬いて一切往生の知識等に白(もう)さく、大きに須(すべか)らく慚愧(ざんぎ)すべし。釈迦如来は実にこれ慈悲の父母なり、種種の方便をもって我等が無上の信心を發起せしめたまえり、と。已上」

こういう文章が、このすぐあとに出てくるわけですね。これは『般舟讚』からの引文です。これは和讃にもなってるから、みなさんよくご存知ですね。

「釈迦弥陀は慈悲の父母 種種に善巧方便し われらが無上の信心を 發起せしめたまいけり」

(「高僧和讃」東聖典496頁、西591、島11-29)

これは和讃にもなつとるね。参考書なんかを読むと、これはお釈迦様が『観経』を説いてくださった。そして阿弥陀如来が本願を説いてくださった。それが、弥陀・釈迦の慈悲なんだと、こういうふうに書かれています。それは間違いはないでしょうね。しかし、この文脈で読んだらどうなりますか。も少し親鸞は正確に言ってると思う。お釈迦様が『観経』を説いて三心積を説いてくださった。そうですね。阿弥陀様がこれから問題にする至心・信楽・欲生の三心を説いてくださった。それが釈迦弥陀の慈悲であると言ってることになります。言ってることわかる？ 今までの文脈から言えば、三不信、三心積ね、そして、自力を策励して他力に目覚めなさい。これこそお釈迦様の大悲でないか。目覚めた至心・信楽・欲生の本願は阿弥陀如来が説いて下さった。これこそ、弥陀の大悲でないか。だから、ここの文章は正確に言えば、お釈迦様が『観経』で三心積を説き、阿弥陀様が『大経』で至心・信楽・欲生の本願を誓って下さった。それが釈迦弥陀の慈悲であると、こう言ってることになる。そうですね。正確に言えばそういうことだということをよく知つといて下さい。参考書は間違ってますが、まあ、うん、正確でないな。だってそう書いとるもん。親鸞聖人は。言つとることわかりますね？ そんなふういきちつと親鸞聖人の意図を正確に読むといいと思います。

まあ『般舟讚』はいいかね？ これしゃべり出すとまたすぐ時間かかるからな。『般舟讚』は、これは日本の正倉院の経典目録の中に古くから日本に伝わったと、目録にはあるんです。ところが、法然が善導大師によって学んでるわけだからね、この『般舟讚』を探しまくったんだけど無い。で、結局法然上人は、『般舟讚』を見ないで亡くなった。そうです。そして亡くなって5年経ってから、仁和寺の経蔵からこの『般舟讚』が見つかった。だからそれ見つかったのは親鸞が45歳の時です。そうですね。そういうことを知つとかんといかんのよ。というのはね。あー、わしは教養があるから…(会場笑) 私たちが大学院くらいの時に、親鸞聖人の…えっと、西本願寺の蔵からね、『観経・阿弥陀経集註(かんぎょう・あみだきょうじつちゅう)』という著作が見つかりました。それは、長〜い半紙にね、『観経』が書かれてる。それから『阿弥陀経』が書かれてる。その

間にず〜と註釈が書かれていってます。ほとんどが道綽と善導大師で書かれていきます。もちろん、法然門下のきつとノートですから、というのは、その『観経・阿弥陀経集註』には『般舟讚』が一文もない。一文もないちゅうことは、親鸞が45以前だちゅうこと。そやね。そうすると、40から45、あるいはその35から45くらいまでは、これは流罪の身だから、その時にあんなものを書いたとは思えない。ということは、結局あれは、法然門下のノートだということになって、筆跡も若いし、親鸞聖人の筆跡に間違いないからすぐに国宝になりました。『観経・阿弥陀経集註』といます。読んでみるとおもしろい。

これも玲(青木玲)に酒酔っぱらってうだうだうだうだ言うてたんですけども、この…親鸞聖人はね、若い時から『大経』の専門家だった。だから29歳で法然に遇った時に「**雑行を棄てて本願に帰す**」(「化身土巻」東聖典399頁、西472、島12-223)とこう言ってる。「本願に帰す」ちゅうのはこれ『大経』の本願だから。だからもう29歳の時から彼は『大経』の専門家だったと思われる。この『観経・阿弥陀経集註』を読むと、全部法然が講義した『観経疏』の註釈が埋められていきますが、おもしろいのは、今日読んだ、みなさん読んだ三心積——至誠心、深心、回向発願心——ここから、他力の至心・信楽・欲生に展開していくところですよね。だから、法然は親鸞聖人に何度か「『観経』の三心積と『大経』の三心とは同じことです」と、「紙の裏表です」というふうに教えています。これ大事なことよ。『観経』の三心積と『大経』の至心・信楽・欲生というのはこれは紙の裏表なんですと、こう教えてるわけですね。何度も言ってますから。

だから『観経・阿弥陀経集註』を見ると、至誠心・深心・回向発願心のところから急に『往生礼讚』に変わります。引文が。みなさん『往生礼讚』言うてもピンと来んやろ？ 後でまた言う。出てくるから。これは当然のこと、善導大師の著作です。ところが、帰って今日勉強する人は見てごらん、『往生礼讚』を見ると一番最初に「龍樹、天親、『大経』に依ってこの讚歌を書きます」と言って善導大師がちゃんと書いている。

「つつしみて『大経』、および龍樹・天親、この土(中国)の沙門等の所造の往生礼讚によりて、」

(真宗聖教全書一648頁、西・註釈版聖典七祖篇653)

つまりこれは、『大経』の讚歌だということになります。善導大師は五部九卷(ごぶくかん)と言われて沢山の著作を書きますが、これだけは『大経』に依ってる。だから、親鸞聖人が『大経』の仏教者ですから、これまでの参考書を見ると善導大師というと必ずすぐに『観経疏』『観経疏』と言って、この中にも大谷大学で勉強した人は、善導大師というとみんな『観経疏』を勉強してきたと思う。それは間違いではありません。しかし『教行信証』をよく読んでごらん、『観経疏』の引文よりも『往生礼讚』の引文の方が多い。つまり親鸞は善導の著作の中で『観経疏』よりも『往生礼讚』に着目したちゅうこと。それを知ってください。今までの参考書はいい加減だからね。一回調べてごらん。多いんだから『往生礼讚』の方が。何故かという『大経』に依ってるからです。ね。そしてそれは今言った、おそらく33、流罪前だと思う、だから33歳くらいの時のノート、ひたすら善導の三心積を、善導大師の講義をしてるのを聞いて、親鸞は三心積を『大経』で読もうとしてるわけです。つまり、三心積の後、『往生礼讚』の引文になるから。だから親鸞て、あれ、天才ですよ。若い時から。もう、法然門下にいた時から、簡単に言えば法然の講義を『大経』で読もうとしてる。だから三心積の後、五念門が出てくる。それから、世親の五念門が出てくるし、そこに曇鸞の『論註』の身業積(身業功德)の文章が一文出てくる。だからそ

の時からも『論註』読んで。だから、若い時、多分あれ33歳ぐらいだと思う、その頃から親鸞の態度というか『観経』を読んでても『大経』で理解しようとしてる。そして五念門で理解しようとしている。自分の、その時から言うように、自分の感覚で読みかえて、自分の意見じゃなくて善導大師の『往生礼讃』でずーっと書いてる。これすごいことですよ。これで、一升は呑める。(会場 笑) いやいや、ほんとほんと。感動しますよ。何で私がこういうこと言うかという、いいですか。その次に『往生礼讃』の文章が出てきます。これがまたやっかいなんですね。ちょっとみなさんで読んでみますか。(東聖典222頁、西227～、島12-65～)

『貞元(ていげん)の新定釈教(しんじょうしゃくきょう)の目録』(円照編)巻十一に云わく、『集諸経礼懺儀(しゅうしよきょうらいさんぎ)』上下、大唐西崇福寺(だいたうさいしゆふくじ)の沙門智昇(ちしょう)の撰なり。貞元十五年十月廿三日に准(なずら)えて堪編(かんべん)して入ると云云。『懺儀(さんぎ)』の上巻は、智昇諸経に依って『懺儀』を造る中に、『観経』に依っては善導の『礼懺(らいさん)』の日中の時(じ)の礼(らい)を引けり。下巻は比丘善導の集記云云。かの『懺儀』に依って要文を鈔して云わく、二つには深心、すなわちこれ真実の信心なり。自身はこれ煩惱を具足せる凡夫、善根薄少にして三界に流転して火宅を出でずと信知す。今、弥陀の本弘誓願は、名号を称すること下至十声聞——ここに印を付けて下さい——下至十声聞——「下至十声聞等に及ぶまで、定んで往生を得しむと信知して、一念に至るに及ぶまで、疑心あることなし。かるがゆえに「深心」と名づく、と。乃至 それ、かの弥陀仏の名号を聞くことを得ることありて、歓喜して一心を至せば、みな当(まさ)に彼(かしこ)に生まるることを得べし、と。抄出」

これねえ、このね、要するに今読んだ文章は善導大師の『往生礼讃』の文章なんです。ところがこの『往生礼讃』は、この『貞元の新定釈教の目録』の十一巻に智昇という人が『集諸経礼懺儀』の上下を入れてると。上下というのがあると。その下の方は、善導大師の『往生礼讃』全て。ね。だから、それやったら『往生礼讃』引用したらいいのに、何でかわからんけどこの智昇の、この『集諸経礼懺儀』から『往生礼讃』をわざわざ引用するわけです。こういう引用の仕方を親鸞聖人がするわけです。ようわからん話やけど。これは、「行巻」や、191ページ。191ページの終わりから1.2.3.4.5.6.7行目、さっきは「信巻」でしたね。ところがさっきと同じ文章が「行巻」にも引用されます。ここちょっと読んでみますよ。科文(かもん)番号100というところね。

「光明寺の和尚(かしょう)は「下至一念」(散善義)と云えり。」つまり善導大師は「下至一念」と言うた。「また「一声一念」(礼讃)と云えり。」『往生礼讃』では言っている。「また「専心専念」(散善義)と云えり、と。已上」と散善義では言っていると。「○」(まる)、そして、「已上」とあって、その後ね、「智昇師の『集諸経礼懺儀』の下巻に云わく、深心は、すなわちこれ真実の信心なり。自身はこれ煩惱を具足せる凡夫、善根薄少にして、三界に流転して火宅を出でずと信知す。いま弥陀の本弘誓願は、名号を称すること下至十声聞——ここにも「聞」がある。これ○(まる)しといて。これ本当は『往生礼讃』では「下至十声一声」になってます。「下至十声一声(げしじっしょういっしょう)」、十声(とこえ)の念仏であっても一声の念仏であってもという意味で、「十声一声」というところを『集諸経礼讃儀』ではこれを「聞(もん)」と読み変えてる。わかりますね。「聞」ちゅうのはこれ信心のことや。「一声」ちゅうのはこれ念仏のことや。そんなふうに、大きな理由は『往生礼讃』の方は「十声一声」になっとる。さっきのところも「聞」に印を付けて下さいと僕言いましたね、あそこも「十声一声」なんです。『往生礼讃』の

方はね。ところがこの『集諸経礼懺儀』の方は「一声」を「聞」に書き換えてる。

ということは、みなさん気がついてる？ あのね、『往生礼讃』やね、「礼讃」ちゅうとこれは、「讚嘆(さんだん)」。礼拝し讚嘆して念仏する。ね。智昇の方は「礼讃」がこれ(「懺」)になつとる。そやね。読み方は一緒やで、「らいさん」、『往生礼讃』、『集諸経礼懺儀』。ところが意味が全然違う。これ「懺悔(さんげ)」やから。こっち(『集諸経礼懺儀』)は懺悔、こっち(『往生礼讃』)は「讚嘆(さんだん)」になつとるね。ですから、智昇が「十声一声」のところを「聞」に書き換えて、そして「十声聞等」というと、「念仏を称える信心は」とこういう意味になる。信心の方に着目してる。智昇はね。親鸞は、それが大変大切だから、ここに『往生礼讃』の文章じゃなくて『礼懺儀』の智昇の文章を引用した。これが第一の理由です。これいいね。

も一つはねえ、この、「行巻」でもこれわざわざ「智昇師の『集諸経礼懺儀』の下巻に」とこう言って、あるいは「信巻」では『釈教目録』に」と出てくる。『貞元の新定釈教の目録』(東聖典222頁)、これは中国の皇帝が、国家の事業としてこの目録を作って、そしてその目録の書物を国会図書館に入れてる。だから、その国会図書館に入っている智昇師の下巻の方に『往生礼讃』があるから、それを引用しますよと、こういう意味なんだけども、どうも、善導の『往生礼讃』よりも朝廷が定めた国会図書館の方がきちっとした権威があるということで、わざわざこういう註釈をつけて、親鸞聖人が『往生礼讃』を『集諸経礼懺儀』から引用する。ここだけではありません。これ「化身土巻」もそうなってる。他のとこ一回調べてごらん。『往生礼讃』を『往生礼讃』として引用するところと、『礼懺儀』として引用するところと二通りあります。何故か。一番大きな理由は、「十声一声「聞」等」、「聞」・信心として、つまりこれですと、「行信不離の信心」として、名号と信心、行信不離やね、だから、おんなじ文章を「行巻」にも、おんなじ文章を「信巻」にも引用しとる。だからそれは「行信不離」ということを言おうとしているということが一つあります。

そやね。ですから、至誠心・深心・回向発願心、あるいは、不淳・不一・不相続と今まで言ってきたけど、実はこれは「名号に帰する」という信心の内容なのよというふうに、ここでもう一回押さえなおしてる。僕言おうとしてることわかるね。名号の信心なんだと。本願の信心というけども、名号、南無阿弥陀仏と、頭を下げたその信心を「十声一声「聞」等に至るまで」とこう言ってるのよと。だから、行と信と離れていない、そういう信心についてこれから三一問答を展開しますよと、こういう文脈になつてるといふふうに思います。なんでそんなややこしいことを言うんやと思うかもしれませんが、この辺がやっぱり親鸞聖人、準備周到なんじゃないかなあ、うん。ふっと三不信、三心釈と言ってくると観念的になっちゃうから。だから、これは、名号に帰する信心ですと、こう言って最後に押さえて、そしてその上で『往生要集』、源信の『往生要集』を引用してきます。

これ大事ですから、ちょっと読んでみましょうか。(東聖典222頁、西228～、島12-66)

「『往生要集』に云わく、『入法界品』に言(のたま)わく、「たとえば人ありて不可壊(ふかえ)の薬を得れば、一切の怨敵その便りを得ざるがごとし。菩薩摩訶薩もまたかくのごとし。菩提心不可壊の法薬を得れば、一切の煩惱・諸摩(しょま)・怨敵、壊(やぶ)ることあたわざるところなり。たとえば人ありて住水宝珠(じゅうすいほうじゆ)を得てその身に瓔珞(ようらく)とすれば、深き水中に入りて没溺(もつにやく)せざるがごとし。菩提心の住水宝珠を得れば、生死海に入りて沈没(ちんもつ)せず。たとえば金剛は百千劫において水中に処して、爛壞(らんえ)しまた異変な

きがごとし。菩提の心もまたかくのごとし。無量劫において生死の中・もろもろの煩惱業に処するに、断滅することあたわず、また損滅なし」と。已上」

これだけの文章です。つまり、「仏教の中で菩提心が何者にも侵されない不可壊の法薬を得たようなものである。」この菩提心という、『往生要集』では菩提心と言ってますが、この文脈から言えば、「名号に帰した信心は、何者にも侵されないのよ。信心が大切なのよ。」こう言ってることになりますね。これが『往生要集』の一つの文章。

もう一つ、「また云わく、我またかの摂取の中にあれども、煩惱眼を障えて見たてまつるにあたわずといえども、大悲愍（ものう）きことなくして常に我が身を照らしたまう、と。已上」

これ有名な、ね、有名な文章ですね。これは、当然のことですが、『大経』の二十願の機の自覚。名号に帰すると言った時に、最終的には、今日も前半にお話したように、第二十願の機。最終的には煩惱というのは、死ぬまで消えない。ね、消えない。けれども、仏様の方が、果遂してください。「必ずそのままで救い撰らずばおかんと仏様が誓うとる。だから間違いなく煩惱の身のままで救われるんだ。」と、こういうことを源信が初めて表明した。

つまり、『大経』の信心というのは、実は最終的には、二十願の機のままで救われていくちゅうことです。」と。どうですか？素晴らしいことでしょ？ 信心を得ると言うと、何か立派な者になるように、あるいは他力の信心に目覚めて、何か、澁刺とこうなるかのように思うけども、実は煩惱の身というのは、死ぬまで消えんのだと。そして、それを、「だからこそ俺が救おうじゃないか」と立ち上がってくれたのが第十八願なのだから、だから「名号に帰する信心、これが仏道を実現していく菩提心。菩薩道で言えば、菩提心と同じことなんだ」と。

そして、菩提心と言うと、偉くなったように聞こえるから、そうじゃなくて、「煩惱のままで向こうから救うてくれる」と。これが他力の信心の、名号を信じるということの内容なんだというふうに、源信の『往生要集』で、もう一度きちっと押さえ直しているちゅうこと。どお？どおて、僕が言ってるんじゃないくて、親鸞がそう言ってますよと。そやね。

菩提心と言うと、これは、主に菩薩道で使われる言葉なんです。ね。ですから菩提心を持つというのは、これは菩薩になるちゅうことだと、こういうふうに理解されてしまうからね、そうじゃなくて、実は「『大経』の信心は二十願の機を救う」ちゅうことやと。煩惱の身であるちゅうことに目覚めて、先程の文脈から言えば、「初めて疑いのない自分自身を見つけた」。わかりますね？

私は一あー、もう何度も申し上げましたが、小さい時から坊さんになるのが嫌でね、あー何人か来てくださいましけれども、小さい寺で、ご門徒が一軒も無いんだ。友達はみんな立派になって行こうが。あーもうーやっぱあ、辛かった。いつも何かやっぱり金持ちになりてえとかさあ、それとか、立派な者になりてえとか。みんな立派な会社に勤めると俺もそうなりたい、そんなことばかり思うて、結局、頭おかしいなって。そしたらいつも言うように先生が、「良いところも悪いところも、あんた自身じゃないかね。良い者になろうとして、悪い自分を捨てようとしてるところに地獄の元があるちゅうことがわからんか！」て怒られてね、「良いところも、悪いところも、丸ごと、この身じゃないか！」それこそ「お前の、私自身でありましたと、本当の自分に頭を下げろ」と。そんな時に、あ一人と比べて勝つとか負けるとか、いつも眼が外に向いて、そして金持ちになりたいとか、名誉を付けたいとか、地位を付けたいとか、そんなことばっかあ思ってたのが、地獄の元や言われてね。そして、ふっと見ると、そう言えば、そうや！先生はいっ

つも偉そうにもせんし、田舎のじいさんそのもので、ぼうっとしとんだ。それでも絶対に嫌ごととか、自分の責任逃れは言わなかった。どんなことがあっても、「私が頂いたものでありますから」と言って、全部引き受けてね。はあーと思うてね。あー俺は今まで、良い自分に成ろうと思うて苦しんどった。丸ごと自分自身やと一回も言えなかった。だから求道というのは、言つとるように、「間違いなくこれこそ自分なんだ」という「煩惱の身」。それに頭を下げる、頂く。「それが求道の一番大切な意味なんだ」と。そういうことですよ。

そうすると、『大経』の信心ちゅうのは、菩薩になって行くんじゃないで、むしろ凡夫になりきって、そしてこっちからは、もう何にも救いの手立ては無いんだと、それでも「果遂せずばおかんと、こう誓ってくださっているのが法蔵菩薩の本願じゃないか」と言って、頭を下げて第十八願の世界をほればれと仰ぐ。そういう意味で、きちっと「名号と信心と離れないのよ」と、こう言つといて、名号と信心と離れない信心は、実は「絶対にそこに仏道が実現するんですよ」ということと、もう一つは、実はそれは「凡夫のまんまで、どこも変えなくて良い」ちゅうことやと。そういう「二十願の機を救う信心こそ『大経』の信心なんだ」ということを、ここまでできちっと押さえてきたと、こういうことになりますね。引用を見てるとそうなってます。立派でしょ？

親鸞という人は偉い人でね。実は、これも申し上げておきますが、三一問答の前に、『往生要集』の引文がある、ね。も一つの山は、「化身土巻」の三経一異の問答というところです。330ページになります。『往生要集』の引文があつて、331ページの3行目からね。(西381～、島12-164～)

ここに、「問う。『大本』(大経)の三心(さんしん)と、『観経』の三心(さんじん)と、一異いかんぞや。」 一つなのか、それとも異なってるのか。

「答う。釈家(善導)の意(こころ)に依つて、『無量寿仏観経』を案ずれば、顕彰隠密の義あり。「顕」というは、すなわち定散諸善を顕し、三輩・三心(さんじん)を開く。しかるに二善・三福は報土の真因にあらず、」 わかりますね。『観経』は顕彰隠密という意義があつて、表向きから言えば、三輩・三心を開いてる。しかし、二善・三福は報土の真因じゃない。自力の心では浄土に行けん。

「諸機の三心(さんじん)は自力格別にして利他の一心にあらず。」 要するに、私たちの思いは、浄土には届かんのだと。「如来の異の方便、欣慕(ごんぼ)浄土の善根なり。」 釈迦如来が私たちに、浄土を憧れさせて、浄土に生まれたいちゅう気を起こさせるために、『観経』は自力で頑張んなさいと説いとるんだ。これが『観経』の表向きの意味です。わかりやすいでしょ？

「これはこの経の意(こころ)なり。すなわちこれ「顕」の義なり。」 表向きの意味はそういうことですよ。それに対して、「彰(しょう)」というは、「今度は彰、隠密の彰。隠れた意味は、「如来の弘願を彰(あらわ)し」、弘願ちゅうのは四十八願のこと。第十八願のこと。これを彰(あらわ)し、「利他通入の一心を演暢(えんちよう)す。」 要するに、「他力の信心に目覚めなさい」。これが裏の隠れた意味ですよ。

「達多・闍世の悪逆に縁(よ)つて、釈迦微笑の素懐(そかい)を彰(あらわ)す。韋提別選の正意に因つて、弥陀大悲の本願を開闡す。これすなわちこの経の隠彰の義なり。」

わかりますね。お釈迦様が、提婆達多とか阿闍世の悪逆に縁つて浄土教が開かれた。本願を説く浄土教が開かれた。だからお釈迦様が、蓮華微笑、まあ、モナ・リザのように微笑まれて、そして韋提希に浄土を選ばした。そこに弥陀の大悲の本願がある。だから『観経』は表向きには、

「自力を尽くしなさい」という方便だけれども、裏から言えば「大悲の本願に目覚めなさい」と、こういうことだと言って、三経一異の問答が始まるんです。いいですね？

ところが、その三経一異の問答が始まる前に、330ページ。「**首楞嚴院（しゅりょうごんいん）の『要集』に、感禪師（懐感）の『釈』**」云々とあって、『往生要集』が引用されるでしょ。これ読み出すと、時間が今日は無いから、知っておいて欲しいのは、『教行信証』の「信巻」の三一問答と、『教行信証』の「化身土巻」の三経一異の問答は、これは『教行信証』の核心になります。その核心を表す問答のどちらの前にも、源信の『往生要集』が引かれている。これは何故か？ 大問題なんですね。

まあ、今までの人たちのあれは、あんまり「それは何故か？」と聞いたら駄目だから、問うてませんが、今知っておいて欲しいのは、『往生要集』、源信の『往生要集』が親鸞の一番の核心の前に、どちらも置かれているちゅうこと。つまり『往生要集』が大事だちゅうこと。簡単に言えば。七祖の中で一番わかりにくいのが『往生要集』やと思わへん？ 道綽と源信やと思わへん？ 法然が一番誉めてるのは、道綽と源信なんや。だからこれは、法然門下に親鸞が居った時に、法然から教えられたんだと思う。

それで、今日は時間が無いので、簡単に申し上げますが、中国の善導大師までは、表向きには、行について、専修か雑修か？ 専修の念仏ならば、百人なら百人、千人なら千人、万人なら万人、みんな必ず浄土に生まれる。ところが、自力が混ざった雑修の行は、「一人も得る者あらず」と。一人も生まれない、というふうに、善導大師までは、勿論さっき言ったように、機の深信はあります。機についてはね。機の深信はありますけれども、全体を見ると、これはやっぱり六字釈を中心にした行の規定です。そして言ったように、行に専修か雑修か、自力か他力か。こっちは他力、こっちは自力。こういう線引きをして、善導大師は論を展開するわけです。

ところが源信まで来ると、さっき言ったように、いくら専修の念仏でも、身が煩惱の身じゃないかと、いうふうに、念仏を称えている人間の方、主体の方に目を向けたのが源信です。しかも表向きには、善導大師は機の自覚ということを書いてくださったから、それ大切なんですね。ところが源信は、二十願の機まで言ってね、いくら専修の念仏を称えても、身が凡夫だから、「煩惱に眼（まなこ）障えられて見たてまつらず」。けれども「大悲はそれを救う」と、こう言って下さると。『往生要集』東聖典222頁）なかなかいい文章でしょ？

源信という人はね、法然も天才ですけど、法然以前で天才と言えば、源信です。その天才だった源信がね、「身は凡夫だ」と。「だから私たちは仏様の世界は見えないのだ」と、煩惱で。けど「仏様の方が救って下さる」と。「これが『大経』の大切なところだ」というふうに、念仏する主体に目を向けて、「凡夫である」ということを徹底的に明らかにしていくのが『往生要集』の仕事なんです。そこに、三経、三願、三機。正定聚、邪定聚、不定聚。人間の方に主体を当てた源信の眼差しね。それを親鸞が引き継いだから、だから、三願、三機、三往生と言うように、最後の親鸞の、さっき言った立脚地、それを導いたのは源信だと言ってるわけです。親鸞ね。自分の『教行信証』の一番の核心のところに、どっちとも源信を持ってくるちゅうことは、「私を最終的に着地させたのは源信なんですよ」ということを言ってるということ、よく知っててください。

源信偉いんですよ。源信はよくわからんからね、みんな。源信、何のことかようわからんと思うけども、源信は『大経』、だから親鸞の和讃わかるでしょ？ 「全仏教を開顕して」って言って

るでしょ？ だから源信は『観経』じゃないですよ。全部の仏教の中から、『大経』の信心を明らかにして、そして二十願の機、これ源信に導かれて親鸞は二十願の機を推究するようになったんです。そこが法然門下の他の人たちと違うところ。

この中でもどうや？ みなさん仏教に目覚めた人居ろうが？ 仏教に目覚めても、根性がちゃんとそうならんから、どうしても理想主義になろうが？ こんなんじゃ駄目やと、もうちょっと頑張らなあかんのちゃうかとか、こんなことしとって本当に救われるんやろうかとか、何かいっつも、もうちょっといい者にならなあかんのじゃないかっていうふうになろうが？ それ十九願の機です。ね。だから親鸞は、法然門下のとこに居った時に、法然の弟子たちは、ほとんどの人が全部十九願の弟子だった。二十願、本当に凡夫だと、頭下げた人が一人も居らんでしょ。凡夫として頭下げてるんやけど、下げてる頭、下げてる根性が凡夫やちゅうことまでわかっるとる奴が居らんちゅう。だからどうしても理想主義になるから、法然門下の人たちは全部、あの、あれやで、『選択集』書写したのは5人居るけど、あの人たちは全部聖道門だからね。戒律保つとろうが。親鸞だけやで、あれ、結婚するの。わけわからんし。だから親鸞だけ違うたんや。それは、今言った『大経』に依る二十願の機なんだと。で、それを教えたのが法然です。

だって、よ一見てみ、「愚痴の法然房」て、あれ、愚痴て、「三毒」の愚痴やぞ。ということは、「二十願の機です」と言ってるのやぞ、法然は。「私は愚痴の法然房です」と言おうが。で、「愚痴の法然房が第十八願に救われたんです」と言っとるわけや。ほで、愚痴って、三毒五悪段で言えば二十願の機に決まっとんのやから。その「二十願のまんま救われたんです」と、法然が教えてるわけや。

ところが、法然に一步先立って、源信が謳（うた）ってるわけや。というふうに『大経』の信心は、最終的には二十願、「煩惱の身だ」ということを外さない。それを徹底的に教えてくれたのは、法然と源信だと言ってるわけです。だから源信は、『教行信証』の三一問答の前に、三経一異の問答の前に源信の文章を持って来てる。大きく考えて、そう考えてください。間違いないから。その内容については、「化身土巻」の方はまた、多分「化身土巻」に行くと思う。

ここはわかろうが？ ここは要するに、「菩提心が大事なんですよ」と。「この信心に依って、仏教の全部が実現するんです」と言ってるのよ。これ信心の仏教やからね。それは龍樹以来、龍樹が「信方便易行」と言った。そして、「信心に依って、阿耨多羅三藐三菩提を得る」、「覚りを得る」と言ったのよ、龍樹が。その龍樹が言ったように、「菩提心こそ、実は信心に依って、仏道の全部が実現するんですよ」と。「それをちゃんと源信言っとるでしょ」と。こう言っというて、そして、それは、実は、二十願の機を、「向こうから救われるちゅうことですよ」というふうに、源信の文章二つで押さえてる。素晴らしいと思いませんか？

源信偉い！ ここに真宗のやっぱり核心というか、一番外してはいけないところがある。すぐに頭がいいから、何か自分が菩薩になったりとか、聞法しとつても、もうちょっといい者にならんとわからんのちゃうかとか、もうちょっと頑張るとか、すぐそんなことになって来る。それ違うんだ。違うんですよ。「そのままいいから、手を放せ」と。「仏様が救うと言っとるやろう」と。「何で仏様の仕事を盗もうとしとるんじゃ」と。こう言っとる。源信偉いでしょ？ 偉い人です、あの人は。

12、3歳で紫の衣を着て、比叡山でトップで出てたのよ。12、3歳で。相撲界で言えば白鵬みたいなもんやな。すごい天才やったのよ。みなさんよう知つとろう？ あの、源信があまり

偉くてね、12、3歳で貴族の家に呼ばれて、そして、法要をするのや。天狗になっとなのや、やっぱり。そしたら絹の反物とかを貰って帰ろう。それを母親に差し上げるんだ。そしたら母親がそれを突き返したちゅうんやね。「私はこんな物を貰うためにあんたを坊さんにしたんじゃない」と。「あんたが本当に仏教者やと言うんやったら、あんたが救われた救いを私にくれ！」と言ったという。偉いぞー！そして彼は隠居すんのやぞ。もう二十歳にもならん頃から、もう天台宗の出世の道から脱落して、そして、横川（よかわ）に行っ、ひたすら『大経』を学ぶのやで。すごいでしょ。そして最後に辿りついたのが二十願の機や。「こっちからは手を放しなさい」と。「もうこっちからはどうにもならん。凡夫だと。何で凡夫だと頭を下げんのか！」と。それができん、僕らはね。しかし、「そのままで大悲の中にあるではないか！」。こういう、これ親鸞やっぱり痺れたやろやね。

まあまあ、そんなふうに源信が素晴らしい親鸞の指南役だった。それを教えたのは法然ですよ。法然偉い！まあ今日は、ここまでにしましょう。この次に三一問答、字訓釈はさっと行きます。それから仏意釈、これもいちいち読んでたら大変だから、まあ、まあまあ進みましょう。あーそして、要するに、「信心に涅槃の覚りを頂く」。「凡夫であっても、信心に他力の方から涅槃の覚りを頂く。そこに大乘の仏道があるんだ」ということを証明していくのが、親鸞の三一問答になります。今日は、それじゃあここまでにしますが、何かあの、質問ありますか？ とうか難しかった言うとったから、どうですか？

質疑応答

田畑先生・・・はい、それでは30分という形で質疑応答の時間にしたいと思います。質問のある方は挙手をお願い致します。

先生・・・何でもいいよ。

『往生礼讃』の、さっき言うたけど『往生礼讃』は行として言えば「礼讃」、「讃嘆」。信心として言えば「懺悔」（さんげ）。讃嘆と懺悔。それが「礼讃」というこの字。これは「讃嘆」。智昇のさっき言うた礼懺という懺は懺悔の懺やからね。だから智昇の方は信心に立って懺悔を言っている。善導の方は行に立って讃嘆を言ってるとうふうに親鸞聖人は見てるというふう覚えてください。

質問者 1・・・聖典の217ページの（西220～、島12-61）

「一つには、一心に弥陀の名号を専念して、行住坐臥、時節の久近を問わず、念念に捨てざるをば、これを「正定の業」と名づく、かの仏願に順ずるがゆえに。」

これについて、もうちょっと何とか言ってください。

先生・・・これさあ、あの、あれやで、法然が、みなさんご存知ですか、法然は40過ぎてからね、ものすごくよくできた人だから、25歳ぐらいから法然は「智慧第一の法然房」と言われていまし

た。それで彼はそれでも救われなかった。だから25歳くらいの時に比叡山を下りて、例えば醍醐寺、それから真言宗、それから東大寺等々の素晴らしいと言われとる先生の所に行って聞くわけです。ところがみんな、まあ単純に言うと、凡夫の自覚とか機の自覚を教える人は一人もいなかった。そうすると、どうなるかと言うと、もっと勉強しなさいとか、もっと立派になりなさいという心持ちの人ばかりやった。そうすると、ところが、もっと立派になりなさいって冗談じゃない、法然の方がずっと上なんだから、そういう意味では。

だから25歳のときに、自分が求道のためにあちこち回っている人達が全部法然の弟子になった。そして、晩年法然は自分は戒・定・慧の三学の器にあらずと。悲しきかな悲しきかなと言って、凡夫であるということを言って、その時に今まで師を訪ね友を訪ねたけど、教えてくれる人は一人もいなかったと書いとる。それははっきり言うと、機の自覚とか凡夫の自覚ということを教える人が一人もいなかった。みんな大学の先生のように偉い先生になりなさいという心持ちの人ばかりやったから、それやったら法然の方がずっと偉いわげやから、その時にみんな醍醐寺の貫主とか真言宗とか、そのへんの偉い人達はみんな法然の弟子になってしまった。だから学者としては法然は誰にも負けなかったから智慧第一の法然房と言われた。彼が天台宗におれば必ず座主(ざす)になっとった。ところが40ぐらいの時に、私は仏教について知らないことは何もないと。そらそうでしょう、大蔵経を5回読んだと言うんですから。全部知ってるよ。

ところが問題がひとつあると。私が救われてないことだと。すごいでしょ。だからあの人はやっぱり父親が漆間時国(うるま ときくに)という人で、殺されてね、遺言で坊主になれと。そして敵も味方もないような仏さまの世界をはっきりさせてくれという遺言を守ったのや、やっぱり。だから若い時から求道心が篤くて、学問としては天才だったけども、それに決しておぼれなかった。だから40過ぎてもう一度経蔵に入って、そして大蔵経をもう一度読み直した。

その時に、今溝口さんが言った「一心に弥陀の名号を専念して」、わかりますね。217ページよ。これは善導大師で言えば、この深心釈(じんしんじやく)の後の方にあるんやけど、「一心に弥陀の名号を専ら念じて」、称名念仏しなさいと。「行住坐臥」(ぎょうじゅうざが)、歩いていようが座っていようが寝ていようが、「十声一声」と言うように、どんだけ時間をかけるかかけないかは別や。「時節の久近を問わず」。念仏すれば必ず、念仏によって捨てられない。「これを「正定の業」と名づく」。なぜかと言うと念仏だけは、仏さまの方から、仏願の方から与えられているんだから、本願の名号だけは仏の意にかなってる、そういう行だから、だからたった一回の念仏でも絶対に救われる。この文章に遇ってあの法然がうおんうおん泣いたと。ね。

みなさん今さっと読んだけど、誰か泣かんか。(笑)あの法然がうおんうおん泣いたちゅうわけですよ。それはさあ、やっぱり、どうしてもこっちから救われたいちゅう、誰でもね。皆さんもそうやし僕らもそうや。やっぱり仏教を勉強してるちゅうことは、やっぱりなんかどうしてもこっちから救われたい救われたいとこういつも思っとる。その根性が切られてね、向うから来てる本願の名号に救われなさいと言ってるわけですよ。ですから全く人間の発想と反対の方向の仏教に触れて、法然は泣き崩れたんだと。

そういうことを、つまり人間の方からはもうどう考えてもどんな天才でも救われないと、さっき言ったように。煩惱の身であると。その煩惱の身を如来の方から「能・令・速・満足」、向うの方から能く満足せしめてくださる。向うの方から来た仏教を表しているのがこの文章だというふうに法然が読んだときに、今まで自分は何をしてきたのか、いったい何を目標にしてきたのかね、

それが全部鏡に照らせるように照らされて、人間ちゅうのは本当に、まああどうにもならんもんやと言って初めて頭を下げて、機の自覚、凡夫の自覚を得た。その文章がこの「一心専念弥陀名号」。これが、この文章によって法然が回心をしたと言われている文章です。

そんな説明になってないけど、溝口さんそれでいいのか？ もうちょっとなんか言わなあかんのか？

質問者 1・・・いえ、ありがとうございます。

先生・・・今申し上げたことわかりますね。この文章が、だから法然の原点だからね。それ知っといってくださいよ。これ暗記しとき、もう。「一心専念弥陀名号、行住坐臥、時節の久近を問わず、念念に捨てざるをば、これを「正定の業」と名づく、かの仏願に順ずるがゆえに」。これが大事、「かの仏願に順ずるがゆえに」。だから法然も本願によって救われていった。本願の名号によって救われていったんだと。この文章はそういう法然の原点になる文章だということを知っといってください。そしてここからまた二種深信が開かれてくるわけよ。さっき言うたようにね。

溝口さんそれぐらいでいいんか？ ほかに何か言わなあかんのか？

質問者 1・・・いえ。

先生・・・いやいや何か、何か言えよみたいな顔してるから。

質問者 1・・・これだけわかるというか、本当にこういうことに頭が下がるというのはやっぱりすごいですね。

先生・・・そうそう。だから、たぶん方向が反対だということがね、どうしても人間にはわからんから、どうしてもこっちから頑張ろうこっちから頑張ろうということが切れんが。それは仏教に遇うちゅうのは、向うからの仏教に遇わないと救われへんのやからね。こっちからやったらどんだけでも偉うなるぞ、立派になるぞ。立派になったからって救われへんぞ。法然が証明してるやん。

ところが、こっちからどんだけ行っても橋がかからんのやと。向うから橋をかけてくれているのが本願なんやと。だから「仏願に順ずる」といって、初めて本願の名号に頭が下がった。それが大事なところですね。方向が変わったと言ってもいい。

質問者 1・・・それで自分が救われたということなんですね。

先生・・・そうそう。法然が救われた。だからその日から、その日からと言うたらちょっと言い過ぎやけど、その日から法然は吉水に出て、そして今までは出家の僧侶が救われる天台宗だと言われたけど、そうじゃない、凡夫なんだと言って吉水で布教を始めていく。それが法然という人です。だから偉かったと思いますよ。つまり、凡夫の身に帰ってね、そしてさっき言うたように「愚痴の法然房」というのは、あれは『大経』の三毒五悪段の愚痴だからね。二十願の機だと言ってるわけですよ。二十願の凡夫の身が向うから救われたんだと、こう言ってるわけだから、親鸞は弟子

だから当然、二十願の機が救われるちゅうことはどういうことやと考えざるを得ない。と思います。

質問者1・・ありがとうございました。

先生・・方向が反対の者に会ったことないか？ あの、人間の体験で言うちょっと変わった奴に会ったときびっくりしょうが。こいつ変わってるううう思うて、変な奴やなあと思うけどよう考えたら俺がおかしいのかなと思おうが。あれやあれ。何かもう妙な全く方向が違う者に触れると鏡のようにこっち側がわかるちゅう。凡夫であったということがわかと。

そういうことがこの一文で法然は読み取ったわけです。すごいすごい。だから法然は人に遇ってない。けど、文章で善導大師以上の善導に遇っている。ということは、もう文章をものすごく読める人やちゅうこと。だから僕らは足元にも及ばんから。だから僕らなんて先生に会うてもまだわからんのやからね。ところが彼は文章によって行間がわかる。情感が分かる。善導がなぜこういうことを言うか。これたぶん善導大師は、この人偉いと。念仏に頭下げてわんわん泣いたんやと。ようわかったんやな、これ読んで。偉いと。そんなふうになら法然は天才的な文章力がありますからね。生きた善導に遇ったんじゃない？

田畑先生・・それでは他にいかがでしょうか。

質問者2・・ちょっと途中でぼうっとして聞きそびれてしまったんですけども、「下至十声聞」のところで、智昇さんの『礼懺儀』の方では、

先生・・「聞」になっている。

質問者2・・「聞」で、『往生礼讚』で、

先生・・の方は「十声一声」になっている。

質問者2・・なるほどですね。

先生・・だって礼讚は念仏だから、最後まで十声一声、念仏だとほめているわけよ。ところが智昇の方は念仏による信心、名号による信心だから「十声聞」というふうにそこを書き変えてる。だけど親鸞から言えば、それは書き変えてるから、その書き変えたものはおかしいじゃねえかとか普通思うんだけど、親鸞から言えばそこを「聞」に書き変えて、『往生礼讚』というあの「礼懺」を「懺悔」にして出している。この人偉い人やと。親鸞はものすごく感動したんじゃないですか。

今言ったように、向うからの方向が違う方向からあったら、こっちからは懺悔しかないから、頭を下げてすみませんでしたと言うしかないからね。だからそれを智昇という人は明らかにしてくださっとるという意味で智昇の『礼懺儀』を引く。

質問者2..わかりました。一声ということで行の礼讃で、聞というところで、

先生..「聞其名号信心歓喜」

質問者2..の聞で信心であるという形で書き変え、書き変えというか、その智昇さんの方を採用されたということですね。わかりました。ありがとうございます。

質問者3..えっと、先生あのう、ここの「かの仏願に順ずるがゆえに」ということで、法然上人はこの善導大師を先生と仰いだということでしょうか。

先生..はい。まあそうですね。この文章が法然が回心をした文章ですから、この文章によって本願の仏教がわかったわけです。法然に先立って、なぜ念仏によって向うからの仏教が開かれてきたかという、それは「かの仏願」があるからだ。仏の本願の方が「十方衆生よ」と呼んでくれとる。「凡夫よ」と呼んでくれとると。その仏願によって救われたんだと善導大師が言っている。それを見て善導大師は偉い人だと。「偏依善導一師」（へんねぜんどういっし）。

質問者3..「偏依善導一師」ということは、これで法然上人が呼ばれたんですかね。

先生..直接的にはこの文章から読めばそういうことになると思います。

質問者3..ありがとうございました。

質問者4..今日先生、『愚禿鈔』のどこ、三願転入のところ、すごく大事なところありがとうございました。

先生..いやいや。はい。

質問者4..それで、今日の440ページのですね、ちょっと、語句の問題かもしれませんが、「第六には」というところが、これどうしてここは「決定」がないのかなと思ったんですけど。「決定して」というのが、第六には「決定して」ということがないのは何か意味があるのでしょうか。440ページの七深信のところ。（『愚禿鈔』、西522、島14-20）

先生..要するに、全部「決定」という言葉が付いているのやけど第六にはないのやろう。うん、僕も印付けとる、そこは。

質問者4..それで、これは、この「経」というのは『観経』だと思いますけど、そうするとこの「依って」、ここはどういう意味..

先生・・・いや、これはさあ、これはな、「ただ仏語を信じ決定して行に依る」と。この第五のところはな、これはさっき言うたように「三遣・三随順」のところを見ると、最後には「仏願に随順する」。そやなあ。441ページの最初から8行目のところに、「三随順というのは一つには仏教に随順する。二つには仏意に随順する。三つにはこれ仏願に随順する」とあろう。そして仏願に随順した人を「真の仏弟子と名づく」とあろう。で、これが第五深信の内容になるわけさ。

だから第五深信というのは本願の名号に帰して、真の仏弟子になるちゅうことだと。こういうふうになるわけさ。そしてそれを受けて「この経に依って深信す」と言うんだから、おそらく『大経』の信心なんだと。こういう意味なんじゃない？ だからこれ第五を受けているために「決定して」という言葉がない。

質問者4・・・必要ない。

先生・・・ないんじゃないかと僕は思う。おっしゃるように「決定して」がないちゅうのは、これは僕も見たらわかるけど、「決定して」がないと書いとるちゃんと。それは第五深信を受けて「この経に依って深信す」。つまり『大経』の本願を信じるんだと。こういう意味なんじゃないかと思うんですよ。

だから、第五のところに「決定して行に依る」、名号に依ると、こういうことがあるから、それを受けて「この経に依って深信す」と、素直に言ってんじゃないかなあと、そんなふうには今のところはそんなふうに思います。ただ、もうちょっと待って。熟成するまで。(笑)

質問者4・・・ありがとうございました。

先生・・・今ね、アール・ヌーヴォー（ボージョレ・ヌーヴォー？）のどこやから。(笑)

たぶんそうだと思いますよ。うん。

田畑先生・・・はい、岡田さん。

質問者5・・・あのう、緻密な理解はできてないですが、非常に感覚的にはよくわかったような気が致します。で、質問ですが、ちょっと叱られるかもしれないですけども、源信という方が出てみえたのに法然、親鸞が出てみえるまで随分暇がかかっている。しかし源信は、法然、親鸞の言われるようなことはすでに包含されているような気がするんですが、なぜ源信は比叡山をお下りにならなかったんですかね。

先生・・・ああ、それはねえ、例えば法然は比叡山を下りたというけど、法然は死ぬまで「天台沙門源空」を名のりますからね。つまり天台の沙門だと、いうふうに法然は死ぬまでやっぱり天台沙門で居るわけです。というふうに昔は天台宗が仏教の学場だから、そこでどれだけの開花を、花を開かせるか、それが居る人の責任であって、山を下りるといようなことはほとんどなかった。

山を下りたのは鎌倉時代になってから親鸞、日蓮、道元、この辺でしょ。だからそれまでは全部天台宗が学場でね、そこで勉強するしかなかったから、下りる代わりに彼は隠遁したんや。天

台宗の中でもね、その出世街道からこぼれ落ちた人たちが例えば横川（よかわ）に集まる。というふうには隠遁した。だから源信ははっきり自分は隠遁すると宣言してるけども、下りては来なかった。それはやっぱり仏教者だと、最後まで仏教者だということがあるからじゃないかと思われまじすけれども、

質問者5・・浄土真宗に相当する宗教が比叡の山の中で開かれていたと。

先生・・あの、いつも申し上げますように七祖の人たちは全部浄土真宗に立ってました。そういう意味では浄土真宗はいつも開かれていると思います。源信と法然、親鸞の間が長いじゃないかと言うけど、曇鸞の方がもっと長い。曇鸞をちゃんと認めて曇鸞にちゃんと立脚した人は親鸞が初めてですからね。だから曇鸞なんて450年代の人だから、親鸞は800年でしょ。四五百年経って親鸞が出て来てるからね。だからそういう意味では何で源信が居るのに法然まで出て来ないのかって言われても僕はわからん。(笑)

質問者5・・いやまあ、あの私は別に文句を言ってるのではなくて(笑)、源信を少し勉強して、最後の大事なところで、まあちょっと病気で倒れたもんですから、

先生・・はあ、源信偉かったでしょう。偉い人でしょう。

質問者5・・それはもう、ものすごく偉くて感動して、それを最後まで勉強できなかったことを非常に悔いているんで、絶対やらなきゃなと思ってますが、あの、それがものすごく心に、こんな人がいながらなぜああいう時代経過を経たんだろうと思ったわけですね。

先生・・いや、やっぱりねえ、今言ったように、七祖はそれぞれの時代を生きた人だからね、源信を源信として読むとわからん。やっぱりものすごく大きな人で、そして大乘仏教全部を踏まえているんなこととおっしゃるんでね、そこまでこっちに学識がないためにね、これ何を言ってるのかようわからんのですよ。だけど親鸞の眼から見るとわかる。親鸞がこう見たんだとか親鸞がこう読んだというところから見ると、ああ源信すごい、すごいさすがに七祖やと。いうふうに私はそう見ました。

質問者5・・まあその時一つ考えたことは、比叡山というその枠組みを外れて、一つのまあ言わば革新的な宗教を引き起こすということは、堅実な道ではないのでないかとお考えになったのかなというようなことふと思ったのですが。

先生・・はあは、そうすると、どういうことどういうこと？

質問者5・・いや、例えば・・

先生・・だってそれは、そういうことからするとさあ、はっきり言えば、真宗を、比叡山を下りて、

それこそさっき言った凡夫の身として、この市井、私たちの生活の場所ではっきりしたのは親鸞が初めてですよ。だから法然までは、これはやっぱり聖道門のにおいがすると、曾我さんそう言っていました。法然まではやっぱり聖道門なんだと。けど本当の意味で凡夫の仏道にしたのは親鸞しかおらんと。いう意味では初めて比叡山から下りて来た。ということが実現したんじゃないでしょうか。

質問者5…はあ。

先生…法然も今言ったように天台沙門源空は生涯名のりますからね。しかも戒律は生涯保ちますからね。だから結婚もしてなかった。そういう意味ではやっぱり法然という人は聖道門なんですよ。聖道門の立場で真宗を明らかにしてくださった。

ところが親鸞は、これはもうまるで凡夫もいいところ、凡夫の立場で凡夫の仏教を明らかにしたという意味で、親鸞という人は初めてそういうことを果たしたんだというふうに思います。

それまで時間かかったのさあ。源信、法然と。

質問者5…はあ。

会場から…時代がやっぱり…

先生…そうそうそう。時間がかかるのさあ、やっぱり。

質問者5…何とも、質問という意味にもなりませんでしたが…

先生…あ、いえいえ、あのう慣れてますから大丈夫です。(爆笑)

田畑先生…もう一人、どうしてもって言う方がありましたら。いいですか。終わりますでしょうか、先生。

質問者5…あのう、時間はありませんけど、結局今日は信の巻、何でわからんのかなて考えてると、今日は「信巻」ですよ。

先生…はい。

質問者5…それで、顕彰隠密の、特に今日はその『観経』に近いその道綽、善導のところを引用されてるわけですよ。

先生…はい。

質問者5…それに、そこに普通は顕の『観経』のことに思えるその道綽さんだけど、よくよく読

んでみると彰隠密の信心、まして本願に類することがこうやって書いてるんだよということを今日先生説明されたんですか。

先生・・・はい、そういうことです。表向きに言えば二種深信なんです。『観経』はね。やっぱり自力から他力へ。これははっきりしています。だから十九願から十八願と。表向き、顕の義で言えばそういうことですね。ところが善導大師はさっき言うたように「かの仏願に順ずるがゆえに」。これは善導大師の言葉ですから、そうすると善導大師も『大経』の本願に救われた。これが隠れた意味としてある。その隠れた意味としてあることを二種深信の後に善導大師は長らく書いておられる。そこに注目した。なぜなら親鸞は隠れた法、『大経』の仏教を明らかにしようとする人だったから。そこを注目した。こんなふうに考えたらどうでしょうか。

質問者5・・・はい。ありがとうございました。

先生・・・それじゃあいいですか。

田畑先生・・・はい。では今日の分は終わりたいと思います。どうもありがとうございました。

先生・・・あの、お陰でしゃべれました。(笑) 倒れるんじゃないかと思ってました。(笑)
ありがとうございました。 南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏 (恩徳讃、終了)

【テープ起こし】：田中志津子さん、都瑠仙一さん、江本真人さん、
伊藤育代さん、熊谷明美さん、住職

【添削】：田畑正久先生、住職